

# バチカンが寄付金で違法「大損投資」

## 「金銭醜聞」続発で窮地の法王

フランシスコ法王率いるバチカン（ローマ法王庁）に、新たな金銭不正疑惑がもたらがった。従来の不正は、バチカン銀行と通称される「宗教事業協会」が舞台だったが、今回は世界中から寄せられる善男善女の寄付金が使われたとされ、事態はより深刻だ。

聖職者による性的虐待スキャンダルが続く中、法王は重大な窮地に立たされている。

話は四年前にさかのぼる。

フランシスコ法王の就任から二年たった二〇一五年。法王は、相次ぐ金融犯罪事件に対処するため、大胆な措置をとった。バチカン内に「監査総監」のポストを作り、全権を与えて法王庁を徹底浄化する狙いだ。大手監査法人「デロイト」イタリア支社から、リベロ・ミローネ氏を引き抜いた。

ミローネ氏は慎重に動いた。チームを集めて仕事を始める時には、盗聴器や監視カメラがないか、音

を立てずに調べた。

幸い、相談役となるジョージ・ベル財務局長官（枢機卿）は気さくなオーストラリア人で、監査総監に協力的だった。自身も一四年に、財務局長官に抜擢されたばかりで、法王が掲げる、「教会の腐敗撲滅」に燃えていた。

### ロンドン不動産に消えた浄財

ミローネ氏はまもなく、疑惑の端緒をつかんだ。

法王を補佐する國務省二局のうち、総務局の様子があやしい。ここは、世界中からの寄付金を扱う部署でもあるが、カネの一部を極秘に海外で運用している気配があった。それも、損失を出している可能性があった。寄付金を違法に投資して、失うことがあつたら、バチカン銀行の不正どころではない、大問題である。

実はこの頃、総務局ではパニツクが起きていた。

「お前たちは違法なスパイ活動を行っている。黙ってバチカンを去るか、司法捜査を受けるか、どちらかを選べ」と通告した。後援者だったベル枢機卿にはこの直前、性的虐待疑惑が再燃した。メルボルン大司教時代の一九九〇年代に起こした事件で、枢機卿は以前に非を認め、いったんは謝罪した。ところが、オーストラリアの検察当局が二〇一七年になって、刑事訴追する方針を示したため、枢機卿は帰国した（その後、有罪判決をうけ現在は服役中）。

### 「教会の悪事はマフィア並みか」

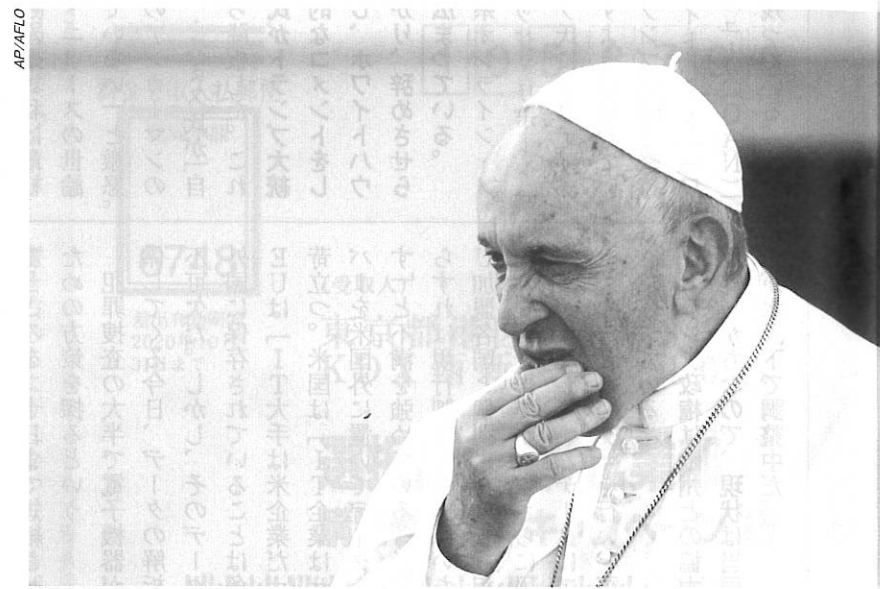
大司教と監査総監の対決はこの後に起こった。

わずか二年前に、法王から全権を与えられたはずのミローネ氏は、辞職するしかなかった。調査はこれで終了だ。肝心のフランシスコ法王は、絶対忠誠を示すベッキウ大司教を切れなかった。それどころか、翌一八年、法王は大司教を枢機卿に昇格させた。

しかし、チェルシー不動産事件は片付かない。新枢機卿は物件購入にこだわり、追加支払いをのん

だ。だが、総務局にはこれ以上投資に回せる金がなかったため、バチカン銀行に肩代わりするよう申し入れた。これによって、総務局の極秘投資がバチカンの官僚機構内に知れることになった。

今年十月、バチカン警察が関係部署の自宅捜索を行った。関係者五人が停職処分となり、捜査に協力している



性的虐待に続く大スキャンダルで小国は大揺れ（フランシスコ法王）

OHANA  
る。法王は、シチリア・マフィア退治で勇名をはせたジュゼッペ・ピニャトーネ判事に、検察チームの指揮を要請した。

在ローマのイタリア紙記者は、「ローマ市民は、カトリック教会の悪事はマフィア並みということかとあきれている」と言うが、事件が大規模捜査を要する、重大な

局を率いるのは、ジョバンニ・アンジェロ・ベッキウ大司教（当時）。イタリア・サルディニア島生まれで、語学に異才を発揮し、英国、フランス、米国、スーダン、アンゴラなどで勤務をした。一年、バチカンに戻り、総務局長に就任。法王庁ナンバー3の高官だ。

寄付金をいつごろから投資に使いはじめたのかはわからない。判明しているのは、ロンドンの高級住宅街チェルシーで一四年までに、ある物件に、総額二億ドル（現在の為替レートで二百十六億円）を投じたことだ。送金は、いくつもの幽霊会社を経由して行われた。契約相手はラファエレ・ミンチオーネという名の、イタリア人投資家。彼はバチカン側に、「物件を直接買うのではなく、物件の管理ファンドに投資してほしい」と要請し、了承された。ミンチオーネ氏は、ロンドンでは「大きく稼いで大きく使う、遊び人」で通っ

ていた。今年になって分かったことだが、問題の物件は、ミンチオーネ氏が二年前に買った時には、三分の一以下の価格だった。しかも、再開発で高級集合住宅に改築するための許可も、この時点では取得していなかった。バチカンはしこたま、ぼられたのである。

一六年六月、英国で国民投票が行われ、欧州連合（EU）からの離脱賛成が多数を占めた。悪いことに、このショックで不動産価格は一時的に急落した。

バチカンのベッキウ大司教はあわてた。極秘投資が大損を出した上、当該物件の所有権さえ持っていないのだ。「物件を買い取らない」と申し入れると、さらに数百億円を要求してきた。

監査総監のチームが内債を強めたのは、この頃だった。すると総務局側も探られていることに気づいた。何を調べているかの内債が始まり、バチカンを舞台にしたスパイ合戦になった。

国民投票翌年の一七年六月、ベッキウ大司教は、ミローネ監査総監と向き合った。

ある英経済紙記者は、「アンゴラは腐敗がひどく、掘削も難しい。石油メジャーも敬遠する。素人が投資をしていたら確実に大損しただろう」と言う。

法王庁のカネ醜聞は今に始まったことではない。ただ、信者の浄財を投資して大損したという事件は、バチカン銀行問題と比較にならない。総額は公表されていないが、バチカン銀行資産（約六十億ドル）の数十倍に達するとされる。いつから始まり、どこまで広がるのか、誰が知っていたのか。得体の知れない闇である。

昨年から今年にかけて、十五世紀創設のシステイナ礼拝堂合唱団で、経営陣による資金洗浄や詐欺容疑が発覚。今年七月、指揮者が辞任し、米国公演が中止になった。その米国では、改革を唱えながら何一つ進まない法王に、「ソ連を崩壊させたゴルバチョフ大統領をっくりだ」との論評がネット上で増えている。

法王は十一月下旬、訪日する。広島・長崎への旅は、厳粛で感動的なものになる。その後はまた、バチカンの大掃除が待っている。